

# プラグマティズムと科学・宗教

——ウィリアム・ジェイムズの真理観——

林 研

## 序

プラグマティズムはアメリカ起源の哲学であり、哲学史において一定の重要性を認められてきた思考法である。しかし、「役に立つことが真である」という単純化した形で理解されがちであることから、その本来の意義は見えにくくなっている。また、主な提唱者達のなかでも、プラグマティズムの定義やそれを用いる意図は必ずしも一様ではない。プラグマティズムの普及にもっとも貢献したウィリアム・ジェイムズ (1842-1910) の場合、これを宗教の問題に適用することにとりわけ熱心であった。

一方、十九世紀から二十世紀初頭にかけてのこの時期、「科学的」な考え方はもはや常識となっており、宗教を考える際にも、科学との関係を見捨てることはできなかつた。ジェイムズは『プラグマティズム』<sup>1</sup>で次のように言う。

1 今日ほど、はっきりと経験論者的な性向の人が多く存在したことはかつてなかつた。今の子どもたちは、ほとん

ど生まれながらに科学的だと言えるだろう。しかし、事実を尊重することによっても、すべての宗教性が私たちの中で無力化されはしなかった。(PR 492)

その上でプラグマティズムは、事実に対する忠実さと宗教的なものとの「両種の要求を満足させることのできるひとつの哲学として」(PR 500) 提唱される。ここには他のプラグマティストとまったく異なる動機を見出すことができるだろう。

ジェイムズの思想は、多くの哲学者と同様にしばしばその人生との関係で論じられるが、特異な宗教思想家の息子として育ち、ハーヴァードで化学や医学を専攻したジェイムズにとって、宗教と科学とはどちらも人生にとって無くてはならないものであった。科学と宗教について語る論者は数多いが、その両者ともを自己のアイデンティティに関わるほど必要とする思想家は少ない。ここにジェイムズの独自性があると言える。

したがってプラグマティズムの哲学も、ジェイムズにとっては、科学と宗教とを調和的に受け入れることができる新しい思考法としての意義が大きかった。そして、事実ジェイムズの著作では、しばしば科学と宗教とがパラレルに語られることになる。

しかし、科学と宗教とが同質的であるかのような見方はもちろん常識的ではない。果たしてこれは正当な議論として成り立っているのだろうか。そこで本稿では、ジェイムズの主張するプラグマティズムを精細に読み解くことによつて、科学と宗教とがどのような関係であり得るのかを改めて問い直してみたい。

## 一 方法としてのプラグマティズム

プラグマティズムという名称を考案し、この考え方を最初に定式化したのはチャールズ・サンダース・パース(1839-1914)である。ジェイムズはプラグマティズムを拡大解釈して大いに普及させたのだが、その考案の荣誉は必ずパースに帰していたため、ジェイムズ流のプラグマティズムにおいても、パースの初期の論文<sup>②</sup>に示されている基本的な原理は、前提として共有されている。一般に「プラグマティズムの格率」と呼ばれるこの原理は、パースによれば以下のようなものである。

〔明晰な理解のためには〕私たちがもつ概念の対象について、実際的な意義をもつだろうと考えられるような、いかなる効果が思い描かれるかを考察してみよ。これらの効果についての概念が、その対象についての概念のすべてである。<sup>③</sup>

これをジェイムズ流に言い換えると、「ある対象についての私たちの思考において、完全な明晰さに達するために、その対象が、考えうるいかなる実際的な種類の効果をもたらすかを考えてみるだけでよい」(PR 506)、そして「どこにも差異を作らない差異はあり得ない——具体的な事実における差異、その事実に基づく行為の帰結における差異、そこに自身を表現しない抽象的な真理の差異はない」(PR 508)ということになる。

3 (林) この学説が哲学史にインパクトを与えたのは、概念は行動に結びついて初めて意味を持つ、という視点を明確に提示したことによる。この視点からすれば、例えば「硬い」という概念は「多くの他の物体によって傷をつけることが

できない」ことを意味し、「重い」という概念は、「それを持ちこたえられない場合、落下する」ことを意味する。<sup>(4)</sup>つまりパースの意図は、概念の意味を明晰化する方法の提唱であった。ジェイムズもまた、「プラグマティックな方法は、第一義的には形而上学的な論争を静めるひとつの方法」(PRG6) だと言う。哲学上の議論は時として言葉の上での空論になってしまうが、プラグマティズムの原理を適用すれば、論点を整理したり、無用の議論を避けたりすることができる。これがこの方法の第一義的な用法なのである。

例えばパースは、聖餐式に用いられるパンと葡萄酒が、カトリック教徒の言うように、その実体において文字通りキリストの肉と血なのか、あるいは比喩的な意味にすぎないのか、という問題を挙げる。パースによれば、行動のきつかけとなるべき感覚に捉えられるものが葡萄酒の特徴を持つ場合、それが本当は血であるというのはまったく無意味な言説となる。<sup>(5)</sup>

さて、ジェイムズもこうした「方法」を基礎としているものの、その適用範囲はパースよりもはるかに広い。元来心理学者であるジェイムズは、人間心理の問題にプラグマティズムを持ち込もうとした。つまり、「帰結における差異」をわれわれの人生や心理的な状態をも含むものとして解釈したのである。例えばジェイムズは同じ聖餐式の例を用いて、「すでに信じている人々にはのみ真剣に扱われる」と留保しつつも、実体に変化したことを認めるならば、「聖餐にあずかる私たちは今や、神性のまさに実体によって養われて」いるのであって、実体の概念が「すさまじい効果を伴って人生に入り込んでくる」(PRG4) としている。

また、次のような記述もある。

哲学の全機能は、世界についてのこの定式表現かあの定式表現かのどちらかが真である場合、私たちの人生の特定

の場面であなたがたと私とにいかなる特定の違いが生じるであろうかを見出すことであるべきである。(PR 508)

このように、ジェイムズは個人的な人生の問題を射程に入れることよって、プラグマティズムをさらに「実際的方法としたのである。本来パースは「プラグマティズム」の命名の語源として、カントの用いた語から「プラクティッシュ」ではなく「プラグマティッシュ」を意図的に採用し、理論と実践という意味では理論のレベルで考えた。<sup>6)</sup>しかしジェイムズはこの区別を乗り越え、むしろ完全に実践につながるものとしてプラグマティズムを捉えた。これはパースからすれば「誤解」であるが、この拡大解釈は方法論自体を変更したわけではない。むしろ、パースが区別して範囲外に置いた本当に具体的な場面、例えば信仰を選ぶかどうかといった場面でこそ、プラグマティズムを適用することに意義があるとジェイムズは見たのである。

## 二 プラグマティズムの真理観と科学

第一義的には概念を明晰にする「方法」であったプラグマティズムだが、それは同時に真理論としての側面を当初から含んでいた。そしてこの側面は科学と密接な関係を持っている。

パースは様々な分野に秀でた職業科学者であり、ジェイムズもそのキャリアを生理学から始めている。このことから推察されるように、プラグマティズムは科学的な思考を基盤として構築されている。実際、パースは次のように言う。

様々な人が、非常に多くの対立する見解から出発するかもしれない。しかし研究が進むにつれ、彼ら自身の外部

にある力によって、彼らはひとつの同じ結論に導かれる……すべての研究者が最終的に賛同するように運命づけられた意見が、私たちが真理の語によって意味するものである。<sup>7)</sup>

この見解は一般的な科学観を思わせるものであり、パースにとってプラグマティズムは、哲学を科学的に行う方法と考えられていると出ることが出来るだろう。

一方ジェイムズは、同じく科学を基礎としつつも、まったく別の方向に舵を切っている。ジェイムズは当時の科学哲学者たちの「反実在論」的な見方に同調しており、『プラグマティズム』で真理論としてのプラグマティズムを説明する際には、次のような話題から語り始めている。

〔科学の〕研究者たちは、どの〔科学上の〕学説も完全に実在の複写ではなく、どの説もある視点から見て有用 (useful) なのであるという見解になじんできた……それらの諸説は人工言語にすぎず、誰かが言ったように、自然についての私たちの報告を書き込む、概念的速記にすぎない。(PR 511)

この見解が大きくパースと異なるひとつの特徴は、「ある視点から見て有用」という点であろう。パースは、プラグマティズムの方法を用いることで、すべての人が見解を一にする集中点を遠くに展望するのだが、ジェイムズの場合、真理が一点に収束することを必ずしも希求していない。その理由は、ジェイムズがあくまでも個人の主観的経験を哲学の基礎に置くからである。例えば、ジェイムズはイギリスのプラグマティスト、F・C・S・シラーに同調して、真理を「人為的な構成物」と捉える見解を提示する。

私たちの感覚を取り上げてみるなら、それがあるということは、疑いなく私たちの制御を越えている。しかし、私たちがそのどれに注意を払い、注目し、私たちの結論において強調を置くかは、私たち自身の興味に依存する。そして、私たちが強調をここに置くかあそこに置くかによって、まったく違った真理の定式化が結果として起るのである。私たちは、同じ事実を異なった風に読む。「ウォータールー」は、同じ固定された細目から成るが、イギリス人にとっては「勝利」を意味し、フランス人にとっては「敗北」を意味する。(PR 594)

つまり、ジェイムズによれば、真理は「実在であるのではなく、実在についての私たちの信念であるから、人間的な要素を含むことになる」(PR 596)のものであって、その事実を提示される当人との関係、つまり「有用性」に左右される。すなわち、極端に言えば個人の数だけ真理があることすら許容されることになる。

しかしもちろん、真理が人によって違うというのは常識に反する。この点はどのように説明されるだろうか。このことについては、ジェイムズのプラグマティズムに顕著に見られる整合性とでもいうべき規準に注目すべきであろう。ジェイムズはシラーとデューイを代弁するかたちで次のように述べている。

私たち「プラグマティスト」の観念や信念における「真理」は科学において真理が意味するのと同じものを意味する。すなわち……観念は、私たちが私たちの経験の他の部分と満足な関係に入る助けになってくれる限りにおいて真となる。(PR 512)。

これは『信じる意志』(以下、『意志』)で表明されている、「もっとも真に近い科学的仮説は……もっともうまく

「へはたらく (work) 仮説である」(WB 45) という記述と合致している。つまり、科学理論が相互に矛盾しないように全体として構成されているように、すべての真理は、それが複数の見方から成っている、相互に矛盾しないことが要求されているのである。このことによつて、ジェイムズの多元的な真理論は一定の秩序を保つことができる。この点については、「有用性」との関係を含めて、後節で再び検討したい。

ところで、ジェイムズが科学的思考を基礎にプラグマティズムを構想するに当たつて、「検証」ということが独特の意味合いを持つことには注意しておきたい。科学は端的に言えば仮説を検証するという方法であるが、先の引用で見たように、ジェイムズにおいては科学の言う真理も「満足な関係」という整合性の問題として捉えられており、検証とは確実性ではなく整合性の確認を意味する。

さらに、次の有名な一節がある。

真理の真理性は、実際のところ出来事であり、過程である。過程とはすなわち真理が自身を検証する過程、真理の真理化 (verification) である。(PR 574)

ここでジェイムズは検証 (verification) という単語をあえて「真の」(veri) と「化」(fication) の複合語として読み、検証とは真理を生み出す過程だと解釈している。ジェイムズのプラグマティズムによれば、仮説に従つて行為し、それがうまくはたかっている状態が「真理という過程」であり、言い換えれば不断の検証がその瞬間瞬間の真理を真理たらしめていると理解されるのである。

この見解は、一見突飛なものに見えるかもしれないが、決してジェイムズが独断的に考案したというものではない。



く、むしろ科学哲学による科学についての理解からプラグマティズムを構想するなかで浮かび上がった来たと考  
えるべきであろう。

このように、ジェイムズのプラグマティズムによれば、真理は検証によって生み出されつつある過程と捉えられ  
る。いわば、真理は動的かつ可塑的なものである。

### 三 プラグマティズムと宗教

ジェイムズは方法においても、真理論においても、人生や心理的問題にプラグマティズムを適用することでパー  
スの原理を押し広げた。その場合の代表的な主題が宗教だと言うことができよう。

ジェイムズは、プラグマティズムを紹介し始めた当初から、これを説明するのに唯物論と有神論の例を使ってき  
た。<sup>10</sup> その説明によれば、唯物論と有神論のプラグマティックな差異は、未来を思い描いたときに現れる。唯物論的世  
界観によれば、世界は最終的に無に帰してしまふ。一方、有神論は未来に希望を与えてくれる。このどちらを信じて  
生きていくかは、人生をまったく異なるものにするであろう、というのである。<sup>11</sup>

また、神学で言うところの「神の属性」についても、単なる無意味な言葉にすぎないものと、人生につながるもの  
とがプラグマティズムによって区別できるといふ。例えば神の「自存性」や「単一性」はわれわれの行動選択に何の  
影響ももたらさない。しかし「全知」と「正義」は、それによってわれわれは行為への報いを期待して行動するし、  
神の「善」はわれわれの恐怖を払いのけてくれる。このようにジェイムズにとっては宗教もまた、個人的かつ実際の  
な事柄として把握されることになる。

何であるかではなく、人間がそれをどのように経験するかである。そうであれば、宗教の価値や真理性は当然「経験的な規準」によって計られなければならない。

『諸相』ではまず、本性や起源を問う「存在判断」と、価値や意義を問う「精神的判断」とに問いを区分すべきであることが指摘される。この両者はどちらも「他方から直接的に演繹され得ない」(VRE 13)判断であるから、それぞれ独立に考えられなければならない。しかし宗教については、精神的判断が独立的に扱われて来なかつたとジェイムズは考える。

では、価値や意義といったものはどのように判断されるのか。一般に「私たちがある精神状態を他の状態よりも優れていると考える場合」、その理由は、「私たちがそこに直接の喜びを得るためであるか、あるいはそこから人生にとって重要な善き果実がもたらされると私たちが信じるためであるかのどちらか」(VRE 22)だとジェイムズは言う。これはつまり、価値や意義というものはそもそもプラグマティックに判断されているものだという指摘である。

したがって宗教の価値は、それが人生に与える効果によって評価される。なぜなら、経験的な方法が指標とすべき、宗教生活における「差異」は、その信仰によってどのように生きるかという点にのみ表れるものだからである。そしてさらに、プラグマティズムによれば、帰結において善い価値が導かれることは真理性に結びついていく。

宗教の効用 (Use)、宗教を持つ個人へのその効用、その個人自身の世界への効用、これらは宗教のなかに真理があることの最高の論拠である……真であるものとは、うまくはたらくものことである。(VRE 411)

しかし、このような状況において、「うまくはたらく」とはどういう状況を指すのか。このことについて、『意志』

では次のように言われている。

もし宇宙についての宗教的仮説が適切であれば、そのときその仮説のもとにある個々人が生活の中で自由に表現する行動的な信仰は、その仮説を検証する実験的なテストであり、またその仮説の真偽を説明することのできる唯一の手段である。(WB 450)

先述のように、ジェイムズにとって検証は真理の真理化であるから、人が宗教を信じて生活することが、その宗教を真理化していくことだということになる。

このように、宗教に関してはプラグマティズムが主に価値判断の基準に用いられるため、有用性が強調される傾向にある。しかしこの有用性とは、そもそもどういう意味であろうか。

#### 四 整合性と有用性

ジェイムズのプラグマティズムは、パースの構想した「行動に結びつく」というコンセプトを「有用性」へと発展させることで、その適用範囲を大幅に拡大した。しかし、プラグマティズムが激しい批判を浴びることになったのもここに原因がある。確かに、「役に立つことが真である」という言説を、これだけ取り出して見るならば、批判はもつともなことであろう。しかし先に見たように、ジェイムズは他の経験との整合性を常に検証することにも力点を置いており、ここを強調するならむしろ科学の方法と大差がないことにもなる。つまり、プラグマティズムの正当性と独自性は、整合性と有用性との関係をどう見るにかかっているとさえ言えるのである。

ではまず、整合性の面について見てみよう。ジェイムズは、プラグマティズムの言う「うまくはたらく」ということについて、次のように言う。

私たちははたらくであろう理論を見つけなければならぬ。そしてそれは極めて困難なことを意味している。というのも、私たちの理論はすべての以前の真理と、ある新しい経験とを媒介しなければならぬからである。「第一に」それは可能な限り常識や以前の信念を混乱させないでおかなければならない。そして「第二に」それは正確に検証されることのできる何らかの感覺的目標物か何かへ導かなければならない。「はたらく」ということは、これらの両方を意味するのである。(PR 580-1)

つまり、「以前の真理と新しい事実と、その両方との整合性が常にもつとも命令的な要請」(PR 581)なのであって、整合性は有用性よりも厳格な基準と考えられると言える。また、観念の真理性は、「同じく認められなければならない他の諸々の真理との関係にまったく依存するであろう」(PR 519)ともされていることから、他の理論や常識と調和しない仮説は、それがいかに役に立つものであってもプラグマティズムは容認しないと断言するのである。これはしばしば見落とされる点であろう。

それでは、ここに「有用性」はどのように関係してくるのだろうか。ジェイムズは、森の中で遭難したとき、牛の通ったあとを見つけて「この先に人が住んでいる家があるにちがいない」と仮説を立てるケースを例に出す。

真である思考が有用なのは、その思考の対象である家が有用だからである。このように、真である観念の実際の

な価値は、第一義的にはその対象が私たちに對してもつ實際的な重要性に由来する。實際、対象はいつも有用であるわけではない。別の機会には、その家に用はないかもしれないのである。(PR 575)

これについては、有用である場合よりも、有用ではない場合について考えた方が理解しやすいかもしれない。つまり、そこに家があることが事実に真であっても、そのとき実際に困っていないならば、人はその仮説を實際に確かめることをしないだろう。この場合、真理は真理化されないことになる。ジェイムズの「検証」概念は、先述のように真理を動的な過程としてのみ捉えることを要請する。したがって、検証が必要ではない場合、すなわち有用ではない場合、真理はそこに生まれないということになる。そしてこれを逆に見れば、真理が真理化されるなら、そのときそれは有用なのである。

もちろん、ジェイムズは直接検証されない「真理」を否定はしない。むしろ、「検証されていない諸々の真理は、私たちがそれによって生きる真理の圧倒的多数を構成している」(PR 576)ことを認めている。しかしこの場合も「間接の」検証は行われているという。この場合、「推定の検証とは、その推定が頓挫や矛盾に導かないこと」(PR 576)であり、「どこかで面と向かってなされる直接の検証」(PR 577)を指し示すことによって信用され通用するという。したがって、この間接の検証において必要なのは整合性のみであって、有用性はここに関わっていない。

一方、人が何らかの要求から仮説を抱き、それに従う行為によって要求を満たそうとする場合、これは直接の検証であり、そのとき仮説が「うまくはたらく」ならば、それは価値を求めてそれを得るという状況を意味しており、「有用である」と同義だと考えられるのである。そして直接の「検証」が「真理化」であるならば、「有用であることが真である」という公式が成り立つ。ジェイムズの言う有用性は、本来この意味で捉えられるべきものである。(林)

とはいえ、ジェイムズによるプラグマティズムの拡大解釈は、基本的に人生の問題、心理的な問題への適用からなされているため、有用性の議論は必ずしも厳密ではなくなっている。例えば、「観念は、それを信じていることが私たちの人生にとって有益 (profitable) である限りにおいて〈真〉である」(PR 620)、あるいは「プラグマティックな原理に基づく場合、私たちは人生にとって有用な帰結が流れ出てくる仮説なら、いかなる仮説をも拒絶することはできない」(PR 606)といった記述に関しては、しばしば批判される形のプラグマティズムに限りなく近づいて見えることは否めない。しかしここでも、あくまでも整合性が基礎にあることを思い起こす必要がある。

ジェイムズによれば、「私たちにとって信じた方がよりよいものは、その信念が他の極めて重要な利益とたまたま衝突しない限り、真」(PR 621)であるが、ここで衝突する相手については、「私たちの諸真理のうちどのひとつをとっても、その真理の最大の敵は、それ以外の私たちの諸真理であろう」(PR 621)と想定される。つまり、有用性は真理の基準ではあるけれども、その条件として、他の諸真理と整合的であることが、やはり前提なのである。

また、『諸相』では宗教の真理性がその効用によって判定されていたわけだが、その「宗教の果実は、常識が判断しなければならぬ」(VRE 310)ということが指摘されている。ここでも広い意味での整合性が前提となっているのである。

## 五 科学と宗教

科学と宗教との関係は今日様々に語られているが、一般的な見方としては、「宗教の事柄は科学的に証明が出来ない」ので「信じない」あるいは「別の次元のものとして態度を切り替えて考える」というものが主流であろう。これに対してジェイムズは科学と宗教とをパラレルに見ると言う特異な見解を持つ。このことを、ここまでの考察をふま

えて検討してみよう。

まず、ジェイムズは、比較的初期の『意志』から一貫して、宗教の語ることを「仮説」と呼ぶ。この用語がすでに科学と宗教との境界を取り除くことを暗示していると言える。そしてまた、科学と宗教については、次のような言明が見られる。

明らかに、科学と宗教はどちらも、それぞれそれを実際的に使える人にとって世界の宝庫を開くための真の鍵である。また明らかに、どちらも網羅的ではなく、どちらも他方と同時に利用するのに排他的ではない。(VRE 116)

これを見る限り、ジェイムズにとって科学と宗教は相補的なものであり、両者は権利上同等のものと考えられている。

また、仮説の取り扱い方に関しては同質的でさえある。その取り扱い方とは、仮説の真偽がプラグマティズムの原理によって判定されるということである。仮説が他の諸経験全体と整合的であること、それが実際のな場面で有用であること、この基準は科学においても宗教においても、ある程度すでに適用されていると見ることができ。

というのも、ジェイムズ特有の徹底した経験論からすれば、科学も主観を経由した経験から成る仮説を、行為の差異に表れる実際の結果によって検証していると言えるからである。例えば唯物論的な近代医療も、治療という実際の結果から構成されてきたものにはかならない。つまり科学と宗教はいずれも、事前に確実な知識がないにもかかわらず、それが真であるかのように行為することによって、仮説を検証すなわち真理化する営みだと言えるのである。

15 (林) また、ジェイムズは、『意志』と『諸相』において「宗教の科学 (science of religions)」という構想を提案する。これ

は宗教的命題について公平な分類や比較を行い、宗教的「仮説」を公的な議論の中で洗練させていくことを目的としている (VRE 408-9)。科学の時代に宗教を語るには、宗教を公的な議論に開放して、諸教義を再解釈していく必要がある、というのがジェイムズの立場である。

しかし、「宗教の科学」とは、宗教を唯物論的な科学の世界観に組み込むことではない。本稿冒頭の引用で見たように、ジェイムズにとって科学は経験論的態度であり、事実のみを扱うことを意味する。宗教に関して言えば、神について何かを語ることは科学的ではないが、少なくとも人間がいわゆる宗教的経験をするという事実自体は、非科学的と呼ばれるものではない。

そしてまた、そうした経験から「仮説」を導き出すことはできる。それは例えば、「高いところからエネルギーが流れてきて(私たちの)要求に応じ、現象世界の内部で作用することになる」(VRE 408)あるいは、「私たちが宗教的経験において結ばれていると感じるその(より以上のもの)は、向こう側では何であろうと、そのこちら側では、私たちの意識的生活の潜在的な連続である」(VRE 457-8)といったものである。

これらの「仮説」には、科学的な知見と衝突しないように細心の注意が払われていることが見て取れることと思う。これがジェイムズによる「仮説の洗練」の試みだと言える。つまり、「宗教の科学の義務のひとつは、宗教を他の諸科学との連絡のうちに保つこと」(PR 457)とされるように、ジェイムズの見解では、科学と宗教はそれぞれが整合的であるだけでなく、科学的仮説と宗教的仮説の間でも整合的であることが可能だと考えられているのである。

そもそも科学という営みが、他の知の領域に比べて圧倒的に多くの人から同意を得られる理由のひとつは、個々の科学理論が全体として大きな整合的体系を作っていることである。それに比べて宗教には、個々の宗教、宗派を統一



する整合性が存在していない。つまりジェイムズが行った試みは、宗教的経験という事実を基盤にすべての宗教が整合的にはたらく仮説を提出することであり、またその仮説は科学の体系とも整合的に相提携してはたらくことが目標とされていたのである。

もちろんジェイムズ自身、ささやかな一歩を踏み出しただけだと考えていたし、プラグマティズムの原理に従うなら、仮説の真偽も時々刻々と更新されていくものである。こうした真理観は、科学や宗教に絶対的現実性を期待する人々には不満なものであろう。しかし、プラグマティズムを介した改善論的態度によってこそ、科学と宗教とは、現段階でかけ離れた価値観のように見えていても、それぞれの実践の中で、いずれは互いに通約可能な営みとなる可能性が期待できるとは言えないだろうか。

## 結

プラグマティズムによって、ジェイムズが科学と宗教とに提示した視点は、要約して言えば、科学的真理を相対化し、これをも真理生成のプロセスと見ることで、そして宗教的仮説には整合性を課すこと、ということになるだろう。こうして捉えなおすならば、科学と宗教は相補的で同質的なものとみなすことが可能となるだろう。すなわち、どちらも現実のなかに真理を作っていくという人間本性の表れの一面なのである。

そしてこのとき、検証することは促進することである。事実、科学はそうやって進歩し、より快適で便利な世界を作ってきた。それなら、宗教もまた、検証されることによってより善い世界を作っていけるはずである。ジェイムズは言う、「宗教は、そのもつとも十分な機能のはたらしきにおいては、すでにどこかで与えられた事実の単なる照明ではなく、愛のように事物を薔薇色の光で見るとなる情熱でもない……宗教はそれ以上のもの、すなわち、新しい事実

の要請者でもあるのである」(VRE 462) 等。

註

- (1) ジェイムズの著作については、以下のものを用いた。  
*The Will to Believe*, 1897. (WB) *Writings 1878-1899*, The Library of America, 1992. 所収。  
*The Varieties of Religious Experience*, 1902. (VRE) *Writings 1902-1910*, The Library of America, 1988. 所収。  
*Pragmatism*, 1907. (PR) *Writings 1902-1910* 所収。  
 本稿では上記著作集のものをテキストに用い、引用・参照部には略号とそれぞれのページ数を示した。引用文の翻訳は筆者によるが、以下の邦訳を参考とした。引用中の強調は原著に従った。「」内は筆者による補足である。  
 『ウィリアム・ジェイムズ著作集2 信ずる意志』、福鎌達夫訳、日本教文社、一九六一年。  
 『宗教的経験の諸相』上下、梶田啓三郎訳、岩波文庫、一九七〇年。  
 『プラグマティズム』、梶田啓三郎訳、岩波文庫、一九五七年。
- (2) Charles S. Peirce, "How to Make Our Ideas Clear", *Popular Science Monthly*, Vol. 12, pp. 286-302, 1878. なお、引用の翻訳に際しては、上山春平・山下正男訳「概念を明晰にする方法」、『世界の名著 パース・ジェイムズ・デューイ』、七六―一〇二頁、中公バックス、一九八〇年、を参考とした。
- (3) *ibid.*, p. 293.
- (4) *ibid.*, pp. 294-5.
- (5) *ibid.*, p. 293.
- (6) 浅輪幸夫「『プラグマティズムの守則』をめぐって」、『研究年報』十五号、十五―三三頁、学習院大学、一九六八年、十八―二十頁参照。
- (7) Peirce, *op. cit.*, p. 300.
- (8) 当時の科学論とジェイムズの科学観については拙論「蓋然性と可能性の科学論——ウィリアム・ジェイムズの哲学と科学——」、『大谷大学大学院研究紀要』二九号、八九―一三三頁、大谷大学大学院、二〇一二年、を参照されたい。
- (9) 「科学は、その本質においてとりあげられる場合、ひとつの方法のみ意味するものであり、いかなる特別な信念をも意味

「William James, "Address of the President before the Society for Psychological Research", 1896, *Essays in Psychological Research*, Harvard University Press, 1986, p. 134)。

(10) ジェームズが「プラグマティズム」の語を用いて積極的にこれを提唱し始めたのは、一八九八年のバークレーでの講演“Philosophical Conceptions and Practical Results”からである。

(11) “Philosophical Conceptions and Practical Results”, *Writings 1878-1899*, pp. 1086-8.

(12) *ibid.*, pp.1089-90.

(本学大学院博士後期課程第三学年 哲学)

〈キーワード〉有用性、整合性、検証